

民間建設工事標準請負契約約款（甲）  
新旧対照表

（傍線部分は変更部分）

改正後	改正前
<p style="text-align: center;">建設工事請負契約書</p> <p>一～三 （略）</p> <p>四 工事を施工しない日 工事を施工しない時間帯 （削る）</p> <p>五～十 （略）</p> <p style="text-align: center;">（略）</p> <p>（請負代金内訳書及び工程表）</p> <p>第四条 受注者は、この契約を締結した後、速やかに請負代金内訳書及び工程表を発注者に、それぞれの写しを監理者に提出し、請負代金内訳書については、監理者の確認を受ける。</p> <p>2 請負代金内訳書には、<u>材料費、労務費、法定福利費（建設工事に従事する者の健康保険料等の事業主負担額をいう。）、安全衛生経費（建設工事従事者の安全及び健康の確保の推進に関する法律（平成二十八年法律第百十一号）第十条に規定する建設工事従事者の安全及び健康の確保に関する経費をいう。）並びに建設業退職金共済契約（中小企業退職金共済法（昭和三十四年法律第百六十号）第二条第五項に規定する特定業種退職金共済契約のうち、建設業に係るものをいう。）に係る掛金</u>を明示するものとする。</p> <p><u>〔注〕「健康保険料等」とは、健康保険料、介護保険料、厚生年金保険料、子ども・子育て拠出金、雇用保険料及び労働者災害補償保険料をいう。</u></p> <p>（適正な労務費の確保等）</p> <p><u>第四条の二（A） 発注者及び受注者は、請負代金内訳書に明示される労務費が、労務費に関する基準（建設業法（昭和二十四年法律第百号）第三十四条第二項</u></p>	<p style="text-align: center;">建設工事請負契約書</p> <p>一～三 （略）</p> <p>四 工事を施工しない日 工事を施工しない時間帯 <u>〔注〕工事を施工しない日又は時間帯を定めない場合は削除。</u></p> <p>五～十 （略）</p> <p style="text-align: center;">（略）</p> <p>（請負代金内訳書及び工程表）</p> <p>第四条 受注者は、この契約を締結した後、速やかに請負代金内訳書及び工程表を発注者に、それぞれの写しを監理者に提出し、請負代金内訳書については、監理者の確認を受ける。</p> <p>2 請負代金内訳書には、<u>健康保険、厚生年金保険及び雇用保険に係る法定福利費</u>を明示するものとする。</p> <p style="text-align: center;">（新設）</p>

に基づき中央建設業審議会が勧告する基準をいう。以下同じ。)を踏まえた適正な労務費であることを確認する。

2 発注者は、前項の請負代金内訳書に明示された労務費を含む請負代金額を受注者に支払わなければならない。

3 受注者は、次に掲げる事項を行わなければならない。

一 適正な賃金をその雇用する技能者に支払うものとする。

二 労務費に関する基準を踏まえた適正な労務費を直接下請契約を締結する者(次号において「下請負人」という。)に支払うものとする。

三 下請負人との間で、次に掲げる事項を約する契約を締結すること。

イ 下請負人が適正な賃金をその雇用する技能者に支払うこと。

ロ 下請負人が労務費に関する基準を踏まえた適正な労務費を当該下請負人が直接下請契約を締結する者(ハにおいて「再下請負人」という。)に支払うこと。

ハ 下請負人が、再下請負人との間で、建設工事標準下請契約約款第二条の二に定める事項を含む契約を締結すること。

ニ 受注者からの求めに応じて、イ及びロの支払並びにハの契約を締結したことに係る書面を提出すること。

4 発注者は、受注者に対して、適正な労務費の確保等のためその他必要があると認められるときは、理由を付して、相当の期間を定めて、次に掲げる書面の提出を求めることができる。

一 前項第一号の支払に関する書面

二 前項第二号の支払に関する書面

三 前項第三号の契約を締結したことに係る書面

〔注〕第一号の書面としては、賃金を支払った旨の誓約書、第二号及び第三号の書面としては、受注者と下請負人との間の下請契約の契約書の写しの該当部分などが該当する。

5 受注者は、前項の規定による請求があったときは、前項各号に掲げる書面を提出するものとする。

(適正な労務費の確保等)

第四条の二(B) 発注者及び受注者は、請負代金内訳書に明示される労務費が、労務費に関する基準(建設業法(昭和二十四年法律第百号)第三十四条第二項に基づき中央建設業審議会が勧告する基準をいう。以下同じ。)を踏まえた適正な労務費であることを確認する。

(新設)

- 2 発注者は、前項の請負代金内訳書に明示された労務費を含む請負代金額を受注者に支払わなければならない。
- 3 受注者は、次に掲げる事項を行わなければならない。
- 一 適正な賃金をその雇用する技能者に支払うものとする。
- 二 労務費に関する基準を踏まえた適正な労務費を直接下請契約を締結する者に支払うものとする。
- 4 発注者は、受注者に対して、適正な労務費の確保等のためその他必要があると認められるときは、理由を付して、相当の期間を定めて、次に掲げる書面の提出を求めることができる。
- 一 前項第一号の支払に関する書面
- 二 前項第二号の支払に関する書面
- 〔注〕第一号の書面としては、賃金を支払った旨の誓約書、第二号の書面としては、受注者と下請負人との間の下請契約の契約書の写しの該当部分などが該当する。
- 5 受注者は、前項の規定による請求があったときは、前項各号に掲げる書面を提出するものとする。
- 〔注〕第四条の二は（A）又は（B）を使用し、使用しない場合は削除する。

（現場代理人及び監理技術者等）

第十条 受注者は、工事現場における施工の技術上の管理をつかさどる監理技術者又は主任技術者を定め、書面をもってその氏名を発注者に通知する。また、監理技術者補佐（建設業法第二十六条第三項第二号に規定する者をいう。以下同じ。）又は専門技術者（建設業法第二十六条の二に規定する技術者をいう。以下同じ。）を定める場合、書面をもってその氏名を発注者に通知する。

2～5 （略）

（工事又は工期の変更等）

第三十条 発注者は、必要があると認めるときは、工事を追加し、又は変更することができる。

2 発注者は、必要があると認めるときは、受注者に工期の変更を求めることができる。

3 受注者は、発注者に対して、工事内容の変更及び当該変更に伴う請負代金の増減額を提案することができる。この場合、受注者は、発注者と協議の上、発

（現場代理人及び監理技術者等）

第十条 受注者は、工事現場における施工の技術上の管理をつかさどる監理技術者又は主任技術者を定め、書面をもってその氏名を発注者に通知する。また、監理技術者補佐（建設業法（昭和二十四年法律第百号）第二十六条第三項ただし書に規定する者をいう。以下同じ。）又は専門技術者（建設業法第二十六条の二に規定する技術者をいう。以下同じ。）を定める場合、書面をもってその氏名を発注者に通知する。

2～5 （略）

（工事又は工期の変更等）

第三十条 発注者は、必要があると認めるときは、工事を追加し、又は変更することができる。

2 発注者は、必要があると認めるときは、受注者に工期の変更を求めることができる。

3 受注者は、発注者に対して、工事内容の変更及び当該変更に伴う請負代金の増減額を提案することができる。この場合、受注者は、発注者と協議の上、発

<p>注者の書面による承諾を得た場合には、工事の内容を変更することができる。</p> <p>4 第一項又は第二項により、発注者が受注者に損害を及ぼしたときは、受注者は、発注者に対してその補償を求めることができる。</p> <p>5 受注者は、この契約に別段の定めのあるほか、工事の追加又は変更、<u>建設業法第二十条の二第二項に規定する主要な資材の供給の著しい減少その他の工期に影響を及ぼす事象の発生</u>、不可抗力、関連工事の調整、<u>協議の開始の遅延等による当該協議の長期化（受注者の責めに帰すべき事由によるものを除く。）</u>、近隣住民との紛争その他正当な理由があるときは、発注者に対して、その理由を明示して、必要と認められる工期の延長を請求することができる。</p> <p>6 <u>第五項の場合において、工期の延長の請求を行った者は、相手方に対して協議を申し出ることができる。</u></p> <p>7 <u>前項の協議の申出を受けた者は、当該申出が根拠を欠く場合その他正当な理由がある場合を除き、誠実に当該協議に応ずるよう努めるものとする。</u></p> <p>8 <u>第六項の協議の申出は、工期の変更事由が生じた日から</u>  <u>（A）〇日以内に、</u>  <u>（B）速やかに、</u>  <u>書面により行わなければならない。</u></p> <p>9 <u>第六項の協議の申出を受けた者は、当該申出のあった日から</u>  <u>（A）〇日以内に、</u>  <u>（B）速やかに、</u>  <u>当該申出に応じるかどうかについて、書面により通知しなければならない。</u></p> <p>10 <u>第六項の協議の申出を受けた者は、当該申出のあった日から</u>  <u>（A）〇日以内に、</u>  <u>（B）速やかに、</u>  <u>当該申出に係る請求に応じるかどうかについて、その理由を明示して、書面により通知しなければならない。</u>  <u>[注]（A）は、期日を具体的に定める場合に使用する。〇の部分には、工期及び請負代金額を勘案してできる限り早急に申出や通知を行うよう留意して数字を記入する。</u>  <u>[注] 第八項、第九項及び第十項は、使用しない場合は削除する。</u></p> <p>（請負代金額の変更）</p> <p>第三十一条 発注者又は受注者は、次の各号のいずれかに該当するときは、相手方に対して、その理由を明示して必要と認められる請負代金額の変更を求める</p>	<p>注者の書面による承諾を得た場合には、工事の内容を変更することができる。</p> <p>4 第一項又は第二項により、発注者が受注者に損害を及ぼしたときは、受注者は、発注者に対してその補償を求めることができる。</p> <p>5 受注者は、この契約に別段の定めのあるほか、工事の追加又は変更、不可抗力、関連工事の調整、近隣住民との紛争その他正当な理由があるときは、発注者に対して、その理由を明示して、必要と認められる工期の延長を請求することができる。</p> <p>（新設）</p> <p>（新設）</p> <p>（新設）</p> <p>（新設）</p> <p>（新設）</p> <p>（新設）</p> <p>（請負代金額の変更）</p> <p>第三十一条 発注者又は受注者は、次の各号のいずれかに該当するときは、相手方に対して、その理由を明示して必要と認められる請負代金額の変更を求める</p>
--	---

<p>ことができる。</p> <p>一 工事の追加又は変更があったとき。</p> <p>二 工期の変更があったとき。</p> <p>三 第三条の規定に基づき関連工事の調整に従ったために増加費用が生じたとき。</p> <p>四 支給材料又は貸与品について、品目、数量、受渡時期、受渡場所又は返還場所の変更があったとき。</p> <p><u>五 建設業法第二十条の二第二項に規定する資材の価格の高騰その他の請負代金の額に影響を及ぼす事象が発生したとき。</u></p> <p><u>六 契約期間内に予期することのできない法令の制定若しくは改廃又は経済事情の激変等によって、請負代金額が明らかに適当でないと認められるとき。</u></p> <p><u>七 長期にわたる契約で、法令の制定若しくは改廃又は物価、賃金等の変動によって、この契約を締結した時から一年を経過した後の工事部分に対する請負代金相当額が適当でないと認められるとき。</u></p> <p><u>八 中止した工事又は災害を受けた工事を続行する場合において、請負代金額が明らかに適当でないと認められるとき。</u></p> <p><u>2 請負代金額を変更するときは、適切な価格転嫁による適正な請負代金の設定がなされるよう、この工事に係る価格等の変動の内容その他の事情等を考慮するものとする。</u></p> <p><u>3 (略)</u></p> <p><u>4 第一項の場合において、請負代金額の変更を求めた者は、相手方に対して協議を申し出ることができる。</u></p> <p><u>5 前項の協議の申出を受けた者は、当該申出が根拠を欠く場合その他正当な理由がある場合を除き、誠実に当該協議に応ずるよう努めるものとする。</u></p> <p><u>6 第四項の協議の申出は、請負代金額の変更事由が生じた日から</u>  <u>(A) ○日以内に、</u>  <u>(B) 速やかに、</u>  <u>書面により行わなければならない。</u></p> <p><u>7 第五項の協議の申出を受けた者は、当該申出のあった日から</u>  <u>(A) ○日以内に、</u>  <u>(B) 速やかに、</u>  <u>当該申出に応じるかどうかについて、書面により通知しなければならない。</u></p> <p><u>8 第五項の協議の申出を受けた者は、当該申出のあった日から</u>  <u>(A) ○日以内に、</u></p>	<p>ことができる。</p> <p>一 工事の追加又は変更があったとき。</p> <p>二 工期の変更があったとき。</p> <p>三 第三条の規定に基づき関連工事の調整に従ったために増加費用が生じたとき。</p> <p>四 支給材料又は貸与品について、品目、数量、受渡時期、受渡場所又は返還場所の変更があったとき。  (新設)</p> <p><u>五 契約期間内に予期することのできない法令の制定若しくは改廃又は経済事情の激変等によって、請負代金額が明らかに適当でないと認められるとき。</u></p> <p><u>六 長期にわたる契約で、法令の制定若しくは改廃又は物価、賃金等の変動によって、この契約を締結した時から一年を経過した後の工事部分に対する請負代金相当額が適当でないと認められるとき。</u></p> <p><u>七 中止した工事又は災害を受けた工事を続行する場合において、請負代金額が明らかに適当でないと認められるとき。</u>  (新設)</p> <p><u>2 (略)</u>  (新設)</p> <p>(新設)</p> <p>(新設)</p> <p>(新設)</p> <p>(新設)</p> <p>(新設)</p>
--	--

(B) 速やかに、

当該申出に係る求めに応じるかどうかについて、その理由を明示して、書面により通知しなければならない。

[注] (A) は、期日を具体的に定める場合に使用する。○の部分には、工期及び請負代金額を勘案してできる限り早急に申出や通知を行うよう留意して数字を記入する。

[注] 第六項、第七項及び第八項は、使用しない場合は削除する。

(発注者の催告によらない解除権)

第三十五条 発注者は、次の各号のいずれかに該当するときは、書面をもって受注者に通知し、直ちにこの契約の解除をすることができる。

一～十一 (略)

十二 受注者が暴力団（暴力団員による不当な行為の防止等に関する法律（平成三年法律第七十七号）第二条第二号に規定する暴力団をいう。以下この条において同じ。）又は暴力団員（同法第二条第六号に規定する暴力団員をいう。以下この条において同じ。）が経営に実質的に関与していると認められる者に請負代金債権を譲渡したとき。

十三 受注者が第三十八条第一項又は第三十九条第一項各号のいずれかに規定する理由がないにもかかわらず、この契約の解除を申し出たとき。

十四 受注者（受注者が共同企業体であるときは、その構成員のいずれかの者。以下この号において同じ。）が次のいずれかに該当するとき。

イ 役員等（受注者が個人である場合にはその者その他経営に実質的に関与している者を、受注者が法人である場合にはその役員、その支店又は常時建設工事の請負契約を締結する事務所の代表者その他経営に実質的に関与している者をいう。以下この号において同じ。）が、暴力団又は暴力団員であると認められるとき。

ロ 役員等が、自己、自社若しくは第三者の不正の利益を図る目的又は第三者に損害を加える目的をもって、暴力団又は暴力団員を利用するなどしていると認められるとき。

ハ 役員等が、暴力団又は暴力団員に対して資金等を供給し、又は便宜を供与するなど直接的あるいは積極的に暴力団の維持、運営に協力し、若しくは関与していると認められるとき。

ニ 役員等が、暴力団又は暴力団員であることを知りながらこれを不当に利用するなどしていると認められるとき。

(発注者の催告によらない解除権)

第三十五条 発注者は、次の各号のいずれかに該当するときは、書面をもって受注者に通知し、直ちにこの契約の解除をすることができる。

一～十一 (略)

(新設)

十二 受注者が第三十八条第一項又は第三十九条第一項各号のいずれかに規定する理由がないにもかかわらず、この契約の解除を申し出たとき。

(新設)

<p><u>ホ 役員等が、暴力団又は暴力団員と社会的に非難されるべき関係を有している</u> <u>と認められるとき。</u></p> <p><u>ヘ 下請契約又は資材、原材料の購入契約その他の契約に当たり、その相手</u> <u>方がイからホまでのいずれかに該当することを知りながら、当該者と契約</u> <u>を締結したと認められるとき。</u></p> <p><u>ト 受注者が、イからホまでのいずれかに該当する者を下請契約又は資材、</u> <u>原材料の購入契約その他の契約の相手方としていた場合（ヘに該当する場</u> <u>合を除く。）に、発注者が受注者に対して当該契約の解除を求め、受注者</u> <u>がこれに従わなかったとき。</u></p>	
<p>2      (略)</p>	<p>2      (略)</p>